

キュウリのお話

今年は去年とは、転じて、厳しい暑さとなりました。厳しい暑さを形容する言葉に

「炎天^{えんてん}」という言葉がありますが、よく似たものに「炎暑^{えんしよ}」・「炎昼^{えんちゆう}」というものもあり、

見るからに暑そうですが、今年の暑さをよく言い表しているように思えます。炎にとって

大敵は水つまり雨だと思いますが、今年には雨が少なく水不足で困っている地方もあります。

旱魃^{かんぱつ}は夏に雨の少ないことを表す言葉ですが、魃とは天の神様の名前だそうです。そこで

今年各地で神様への雨乞いの行事が盛んに行われています。ただし、雨乞いをすればた

ちどころに雨が降り出すわけではありません。古代中国の殷^{いん}の湯王^{とうおう}は自ら薪^{たきぎ}の上に上り、

雨が降らねば焼け死ぬしかない状況で上帝に祈り、天はその祈りに応えて雨を降らしたと

いいます。修行を積んだ聖職者でもあった国王自らが決死の覚悟で雨乞いをしたから成功

したわけで、その後故事に倣^{なら}って決死の覚悟の雨乞いがよく行われましたが、そのほとん

どは失敗して焼け死んだそうです。雨乞いとはかくも難しいものなのです。

さて、こんな厳しい季節に旬を迎え、私たちの食卓を豊かにしてくれ、しかも、お盆の

お供えにかかせないものに夏野菜があります。特にキュウリとナスは馬と牛になったりし

てお供えにかかせません。そこで今回はキュウリについて考えてみたいと思います。

キュウリは「胡瓜」と書きますが、インドのヒマラヤ山麓原産で、インドでは三千年以

上昔から栽培され、中国へは紀元前二世紀、漢の時代に張騫ちやうけんによって西域からもたらされたといえます。それで、「胡」の字がついたのです。日本には十世紀までに到来し、黄瓜きうり、加良宇利からうり、曾波宇里そばうり、木宇利きうりなどと呼ばれました。しかしながら、外来の作物を栽培することを忌む習慣から、栽培すべきでないとされ、水戸光圀は「毒多し、植えるべからず、食べるべからず」と説いたほどです。しかし、その一方で日本各地で祇園ぎおん信仰と結びつき、祇園の神が川を流れてきた瓜に乗って出現したとの伝承が多く、瓜の中の蛇を祇園の神とする信仰があったらしいといわれます。また、キュウリを祇園社の神饌しんせんとしてお供えしたり、水神すいじんさまや河童かっばのお供えとしてキュウリを川に流すことも行われました。そしてまた、京都の御室蓮華寺おむろれんげじには夏の土用の丑の日に「胡瓜封じ」という厄除やくよけの行事があります。この行事は弘法大師が伝えたとされ、参詣した人は、まず、キュウリを買い、「家内安全」・「無病息災」・「交通安全」など祈願の内容と氏名年齢をキュウリに書いて祈禱きとしてもらい、その後、家に持ち帰り、朝夕三日間患部を撫でて、最後に川に流すか、誰も踏まない土中に埋める。すると、キュウリがその人の病気や厄を持ち去るとされています。ここでもキュウリは特別な力を持つもの、霊や呪力の宿るものとされているわけです。口頃、何気なく口に行っているキュウリですが、考えてみれば、仏教と同じようにインドから西域を通して中国そして日本へと伝わったものですから、仏様へのお供えに適しているのは当然といえます。そして、ただそれだけのものではなく、お盆のお供えとして大切な何かを秘めているようにも思います。